

辻上 奈美江

調査者とリフレクシヴイテイ

— サウディアラビアを訪れた日本人女性の言説を題材に —

いったん結婚しちやえば、女は天国！？ — 郡司みさお

一人前ではないが故に責任義務がない女性は、むしろ自由だけを謳歌し、教養を身につけ、ひたすら消費に励めばよいパラサイト妻で、天国のような状態にあるとも言える — 竹下節子

これらは、日本人女性が著したサウディ人女性に関する言説の一部である。

映画『少女は自転車にのって』を観る私たちの視線について考える資料として、サウジアラビア社会のジェンダー秩序を研究している辻上奈美江さんの論文を紹介します。全文は『関西クィア映画祭 2014 参考資料集』に掲載しておりますので、ご自由にお持ち帰りください。

出典：イスラーム世界研究 第2巻1号（2008年）238-249頁

ポスター制作：ひらまつ、じゅんぺい

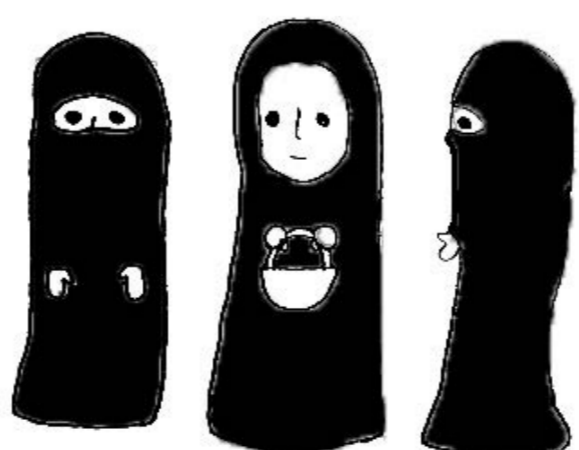
1. はじめに

サウディ人女性と直接交流した経験を有する彼女らは、いったいなぜ女性の地位に関する一般的イメージを覆すのみならず、それを「天国」とまで呼んで羨望視すらするのか。

2. 二つのアプローチ…抑圧論と脱抑圧論

抑圧論は、サウディ女性の置かれた法的立場を明確に指摘してはいるものの、時に彼女らの声や経験に無関心で、欧米的価値観の押し付けに陥ることがある。女性の政治的権利の不在、女性に不利な行動・服装規範、女性なら遺産相続は男性の半分に減額される**不当さ**

脱抑圧論は、個々の女性の声や経験に着目し、女性の自立性や戦略性を見出すことで、これまでサウディ人女性に付与されてきた抑圧や差別のイメージを塗り替えようとする。女性の権利がないといっても、女性が虐げられているとか奴隷状態であるというのとはかなり違ってくる。「実は、女性がとても**大事に**されている」社会



3. リフレクシヴィティ

なぜ日本人女性作家らは脱抑圧論を採用するのだろうか。抑圧論と脱抑圧論のいずれの捉え方も著者らの信念や価値体系と無関係ではない。

(中略) 家父長制が女性によっても支持され、専業主婦であることが女性にとってのひとつの戦略性を形成していたことは、**日本人女性とサウデイ人女性**のジェンダー観を探る上で鍵となる**共通点**であるように思われる。

4. 知の定義権の占有者のアイデンティティ

筆者は、女性としての言葉づかいやふとした仕草までのあらゆることが、男性支配を受容し、再生産し、強化するものであると考えるに至った。けれども、このような筆者を悲憤させてきたのは、まさに男性支配が社会構造に埋め込まれてしまっているがために、当の女性自身が問題の根深さに気づいていないことである。／一部の女性たちにとっての「パラダイス」は、マイノリティが生きにくい**閉塞的な社会**の裏返しなのかもしれない。さらに、「保護」という一見体裁の良い概念は、**支配・服従関係**を再生産する諸刃の剣でもあるのではないだろうか。